

第8回ユネスコスクール全国大会（2016.12.3 金沢大学角間キャンパス）参加概要報告

奈良市立飛鳥小学校 大西 浩明

5度目の参加であるが、回を追うごとに参加者も増え、いずれの場所も熱気あふれる雰囲気がある。まず、開会行事では、松野博文文部科学大臣と前文部科学大臣の馳浩氏が挨拶し、その後のパネルディスカッションでは、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会事務局長の望月浩明氏が、ユネスコ協同学校時代からどのように活動を進化・発展させてきたかという報告があり、現在の1000校近くにふくれ上がった日本のユネスコスクールに求められている課題等にも言及された。



開会行事の様子

ランチョンセッションでは、イオン、ユニクロ、ネスレ日本が企業としての社会貢献活動の紹介があった。ユニクロの「届けよう、服のチカラ」プロジェクトは以前から興味があり、話を聞いてぜひ来年は学校として取り組んでみたいと思い、早速校内で提案させてもらった。



テーマ別交流研修会の様子

午後からのテーマ別交流研修会では、第12分科会「学習指導要領とESD」に参加した。地元金沢の小学校の先生から「つながりに気づく、つながりを築く～ふるさとの伏見川を守り続けるためには～」の実践報告があった。毎年行っているサケの稚魚放流にあわせ、「伏見川はサケを放流して本当に大丈夫な川なのか？」という疑問を出発点に、様々な角度から、また様々な立場の人と交流をもちながら学習を進め、「伏見川宣言」を作成して多くの人に伝えたという内容であった。そのあと、4人のグループに分かれて、「育てたい能力・態度の育成を目指したESDの授業づくり」について討議を行った。私のグループは、静岡、福井、長野の小中学校の先生方だったが、いずれの学校もESDを実践されているものの、なかなか学校文化として根付かない、同じ内容ではマンネリ化してしまう、担当が転勤すれば活動が衰退してしまうなどの悩みを話された。各グループの話全体を討議する場では、次期学習指導要領ではESDの概念や育てたい能力・態度が前面に打ち出されることから、学校教育の中核としてESDを位置付けることや、各学校だけで学習や活動を終息させるのではなく、他校と積極的に交流したり地域に広く活動を広げたりするなど、大きな視点に立って単元構成することの必要性、さらに、ESDカレンダーなどを活用してその中で育てたい能力・態度を明確にし、きちんと評価していくことの大切さなど、実際的な意見が活発に交流できた。

その後、中国・韓国のユネスコスクールでの活動事例紹介や第7回ESD大賞表彰式などがあり、大会の幕を閉じた。ユネスコスクールの数は増えたものの、より質の高いESD実践が求められている。全国の様々な立場の方の話の聞いたり、交流したりできる本大会は、自分の実践に大きな刺激をもらえるものとなった。